

道

2022・2・16

通信 No 1670



ロウバイ

≪今週の練習は「まん延防止等重点措置」が延期になりましたので練習は休止です。≫

次回練習開始予定については「まん延防止等重点措置」が明けてからになります。以降の詳細については随時道通信に掲載します。

「クレッシェンド」・・・音楽の架け橋 B:朝倉

この映画にはおおよそ5つの国が出てきます。製作はドイツ、監督はドロール・ザハヴィというイスラエル人、映画の中のマエストロ・スポルクはドイツ人、若者が合宿するのがイタリア、この映画の主演はイスラエルとパレスチナの若者。そして映画の中で演奏されるクラシックはカノン（バッヘルベル）、「四季」より『冬』（ヴィヴァルディ）、交響曲第9番「新世界より」（ドヴォルザーク）とボレロ（ラヴェル）で、ラヴェルはフランスの作曲家です。映画の中ではこのボレロが重要な役割を果たしているようです。ウイキペディアによれば「同一のリズムが保たれている中で2種類の旋律が繰り返されるという特徴的な構成」だそうです。

要請を受けたマエストロ・スポルクはパレスチナとイスラエルの若者による合同演奏会を企画します。パレスチナの若者は親の心配・反対を押し切って検問を突破しながらイスラエルの楽団の入団試験を受け合格します。

練習が始まってもお互いに見えぬ思い、意思疎通ができず音楽になりません。そこでマエストロ・スポルクは一計を投じます。イタリアの自然豊かな南チロル地方で合宿をし、スポルク自身の家族がユダヤ人虐殺に関わった過去を打ち明けながら、「お互いをちゃんと見ることが始まりの一步」と若者たちの対立と葛藤を解きほぐします。すると音楽は見違えるほどよくなり演奏会成功間違いなし、でした。

ところが合宿を終えイスラエルにもどる直前事件が起きます。イスラエルとパレスチナの若者が恋に落ち、親たちの反対が予想されるので合宿所から逃亡しますがパレスチナの男性は死に、イスラエルの女性は父親に連れていかれます。

楽団は分裂、勿論演奏会は中止。お互いそれぞれの国へ帰る空港ロビー。ガラスで隔てられた向こうからイスラエルの青年がヴァイオリンを奏でます。するとパレスチナの女性がそれに応えます。二人はこのストーリーの最初からお互いの歴史に縛られ意思疎通が難しい状態でした。それがこのラストシーンでガラスの壁で隔てられていても、音楽を感じ、その輪を広げ、だんだん強く、大きくなっていくと一体となりまさにクレッシェンド。

山田洋次さんが言っていました。「国や民族同士が憎しみ合い、紛争が絶えない愚かしさに対し、怒りをぶつけるように『ボレロ』が美しく演奏される。」

私はこの山田洋次さんの言葉に「子ども（若者）には偏見がない 偏見（差別・憎しみ）は大人がつくる」ということと「音楽は素晴らしい！」ということを強調したい。

3月2日（水）に団員懇談会を予定しています。
詳細は次週掲載しますのでご協力ください。

3月27日（日）に清水先生主催のチャリティ
コンサートあります。詳細は次号掲載予定。